平成 26（2014）年 9 月 25 日発刊

南極ＯＢ会　会報

Ｎｏ．２３

発行　南極 OB 会
会長 国分 征
編集　広報委員会

今号の主な内容
○2014 年度南極 OB 会総会・ミッドウィンター祭　○第 16 回「南極の歴史」講話会
話題：○南極観測船「ふじ」便り　○南極尽くしの稚内より　○9 次隊の東北旅行に参加
○南極関連情報　○支部便り（山陽、九州）　○隊次報告
○会員の広場　○広報委員会からのお知らせ　○別冊（資料編）

2014 年度南極ＯＢ会総会開く
ミッドウィンター祭、講話会も開催

2014 年度南極ＯＢ会総会が、6 月 21 日（土）午後、東京・千代田区一ツ橋のパレスサイドビル 9 階のレストランで開催された。総会に先立ち同じ会場で第 16 回「南極の歴史」講話会が開かれ、まず「宗谷時代」のスライド写真の上映、続いて「宗谷」の第 1 次から 3 次までの航海士を勤めた高尾一三氏が、未知の世界に挑んだ苦闘の「宗谷航海記」を講演した。講演に引き続き総会、その後恒例のミッドウィンター祭が同じ会場で行われた。

南極ＯＢ会総会

総会は午後 4 時過ぎから始まった。冒頭神田啓史運営委員長が、逝去された会員 19 名の名前を読み上げ、全員で黙祷を捧げた。

続いて国分征ＯＢ会長が挨拶。「今年は、現在の形のＯＢ会が 2004 年 11 月に発足して 10 年になる」として、この 10 年間の主な活動を報告した。06 年は日本の南極観測事業が始まって 50 周年になるので記念行事を開催、07 年 10 月に会報を発足させ、年 3 回発行、この 5 月に 22 号を発行、さらに「白瀬南極探検 100 周年記念事業」、「南極の歴史」講話会発足、各種講演会への講師派遣、ミッドウィンター祭開催、各種出版事業、「宗谷」や初代「しらせ」へのボラ

挨拶する国分会長

ンティアなど活動は広範囲にわたっており、平成 25 年度の科学技術分野における文部科学大臣の科学技術賞を受けていることなど、多方面にわたる活動状況を紹介した。

また来年は、一旦中断していた南極観測を再開して 50 年の節目を迎えるので、企画委員会を発足させて記念事業を計画したい、その企画委員長に渡辺興亜氏（元極地研所長）の就任を要請したい、と提案した。

この後総会議長に増田博氏を指名、活動

増田博議長

報告などの議事に入った。

神田運営委員長はＯＢ会の活動を多岐にわたって説明した。主な点は①運営委員会は毎月第 3 土曜日に開催、会の運営を円滑に進めるため新たに事務局長を置くことにし松原廣司氏が就任した②名簿等を完備するが、プライバシーポリシーの確立を図り、個人情報の取扱い方針を決めた、などである。そして各種タスクの明確化を図るとの方針を示し、運営委員をはじめ委員の氏名を発表した。

そのほか会報およびホームページは柴田鉄治委員長が、アーカイブ事業関係は小野延雄委員長欠席のため神田運営委員長が、南極教室関係は里見穂委員長が、「南極の歴史」講話会関係は渡辺興亜委員長がそれぞれ報告した。

続いて審議事項に入った。規約改正が行われ、会費の納入は「会員、会友」となっているがこれに「賛助会員」を加える事にした。田中洋一会計担当による 2013 年度決算報告はじめ同年度会計監査報告、2014 年度予算案などは、「本誌付録の資料編」で詳細に報告されているのでそれをご覧ください。

ミッドウィンター祭

総会終了後、同じ会場がミッドウィンター祭用に模様替えされ、午後 5 時過ぎから三枝茂さんの司会で祭りは始まった。国分征ＯＢ会会長の開会の挨拶の後、今春まで仙台におられた福西浩さんから来賓の挨拶があり、吉田勝阪神支部副支部長の乾杯の音頭で懇親会に入った。

三枝茂さん

福西浩さん

恒例の昭和基地からの祝電は、牛尾収輝第 55 次越冬隊長と調理担当の竪谷（たてや）博隊員の 2 通が披露された。「しらせ」が昭和基地に接岸できなかった時期があり、55 次隊は規模が若干縮小され、調理と医療担当は 2 名が 1 名になっている。そうしたなかで頑張る竪谷調理担当隊員の心意気が感じられた。

白石和行さん

白石和行極地研究所所長は挨拶で「昨日（22 日）南極観測推進本部の総会が開かれ、今秋出発する 56 次隊の隊長や隊員が決まり、発表された。また、今年の 2 月 16 日『しらせ』がロシアの基地を訪問した際、船首部分の座礁事故を起こしたが、自力で離礁し、当初の計画通り帰国する事ができた。その後船体の損傷を調べ、修理を行い、今秋は予定通り、晴海を出港できる」と報告した。

吉田勝さん

懇談中にも挨拶が続き、井上正鉄秋田支部長、倉田篤元「しらせ」艦長、芳野赳夫 17 次越冬隊長、吉田栄夫日本極地研究振興会理事長らがマイクを握った。

井上正鉄さん

この会場のレストランは、皇居東側お堀と平川門を見下ろすところにある。9階の会場からは皇居の濃い緑の松林を隔てて江戸城本丸跡の方向をたっぷりと見ることができる。久し振りに会った南極の友と南極の氷で割った水割りを頂きながら、夏至で暮れなずむ東京の夕景を楽しむ事ができた。

旧交を温める

（深瀬和巳）

南極 OB 会　国分征会長並びに会員・会友の皆さま

北の空に沈みゆく太陽に束の間の別れを告げた５月末以降、極夜に包まれた昭和基地で私共越冬隊 24 名は全員元気にミッドウィンターを迎えました。

2 月の越冬開始以来、多岐にわたる基地観測・設営作業、そして海氷上や大陸への観測旅行に取り組んでまいりました。半世紀以上もの永きにわたって築き上げられ基地の建物や設備が充実、安定していることや、日本隊が培ってきた和やかさに、南極 OB 会の皆さま方がご尽力されてきたことを改めて認識しております。そして、基地を離れて野外へ出かけた時は、昔と変わらぬ自然の美しさと驚異を諸先輩方と同じように私たちも体験できることに大きな喜びを感じます。

昨年の出発前は、OB 会の皆様方からたいへん温かいご声後をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。遠く離れた日本を懐かしく思い出しながら、真冬の祭典では一人一人が個性を発揮して、皆で協力して準備を進めてきました。越冬隊にとってこの大きなイベントを節目として、後半の活動でも結束力をさらに強めてまいります。基地の維持や極夜明けに展開する沿岸・内陸旅行においても、引き続き安全に留意し、任務の完遂に向けて邁進する所存です。

今後ともご支援、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。本日、北半球の夏至に皆さんもミッドウィンター祭を楽しまれていることと存じます。日本は暑さが厳しいと伺っております。お元気でお過ごしください。南極昭和基地より　平成 26 年 6 月 21 日

第 55 次南極地域観測隊越冬隊長　牛尾収輝　ほか隊員一同

第 16 回「南極の歴史」講話会

（2014 年 6 月 21 日（土）14:30～16:00 レストラン『アラスカ』パレスサイド店）

2014 年度南極 OB 会総会･ミッドウィンター祭の冒頭に、第 16 回「南極の歴史」講話会が開催された。南極 OB 会では現在、「宗谷航海記」の発刊作業を行っており、前半は発刊作業で得られた資料を紹介するフィルムライブラリー「写真で見る宗谷時代」が上映され、後半は、執筆者の一人である高尾一三氏（第１次、２次、３次宗谷航海士）により「宗谷航海記」の講演が行われた。以下、ご本人からの寄稿をもとに紹介する。

「宗谷航海記」

高尾一三（ 第１次、２次、３次宗谷航海士）

第１次の航海

昭和 31（1956）年 11 月 8 日、南極観測船「宗谷」は南極大陸プリンスハラルド海岸に向け、晴海ふ頭を出港した。岸壁には約 5000 人が手を振り､声をあげ見送った。途中シンガポールに寄港し 12 月 19 日ケープタウン港に到着した。ケープタウンでは、約 2 か月分の燃料、水、食糧を搭載、海鷹丸と共に 29 日、南極大陸に向け出港した。約 1 週間の暴風圏を無事通過、1 月 7 日南極大陸の氷縁に到着した。その後「宗谷」は流氷が船体に与える影響等をテストしながら西方へと進み、14 日クック岬沖に到着した。ここでセスナ機が飛び大陸の調査、基地設営場所の調査が行われた。この日は日本の航空機が初めて大陸の上空を飛んだ記念すべき日となった。その後「宗谷」は東に進路を変え東経 40 度線に向った。この線上には基地候補地が予定されている。16 日到着、直ちにヘリコプターが飛び、その報告によるとセスナ機の飛べる開水面Ⓐを発見したとのこと、「宗谷」は群氷域に突入、開水面を目指して南進した。16 日午後開水面に到着、ここでセスナ機が飛び氷状調査を行い、18 日再び、セスナ機による調査を行い、東西に広がる開水面（大利根水道）Ⓑを発見､それよりさらに南に続くリードⓒ等を発見した。18 日「宗谷」はヘリコプターの誘導により､氷山をう回し、密群氷を避け大利根水道を進み、19 日その西端では本格的な砕氷を行い､それに続くリードを進んだ｡突入後は平穏な天気に恵まれ､またクック岬の外洋付近に位置する海鷹丸から送られてくる気象状況は｢宗谷｣の行動にとって大きな力となった。

講演する高尾一三氏

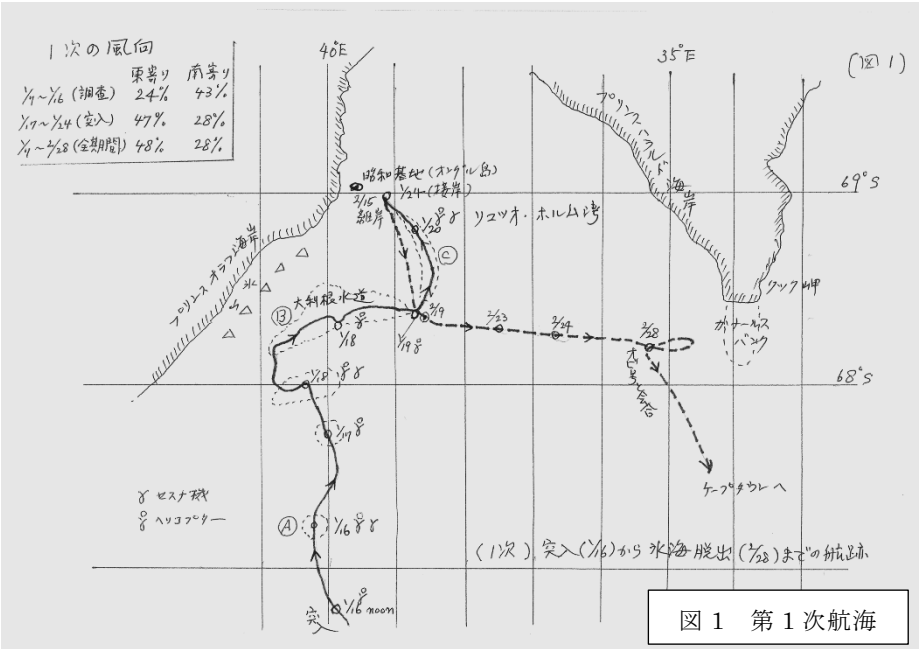


図１　第１次航海

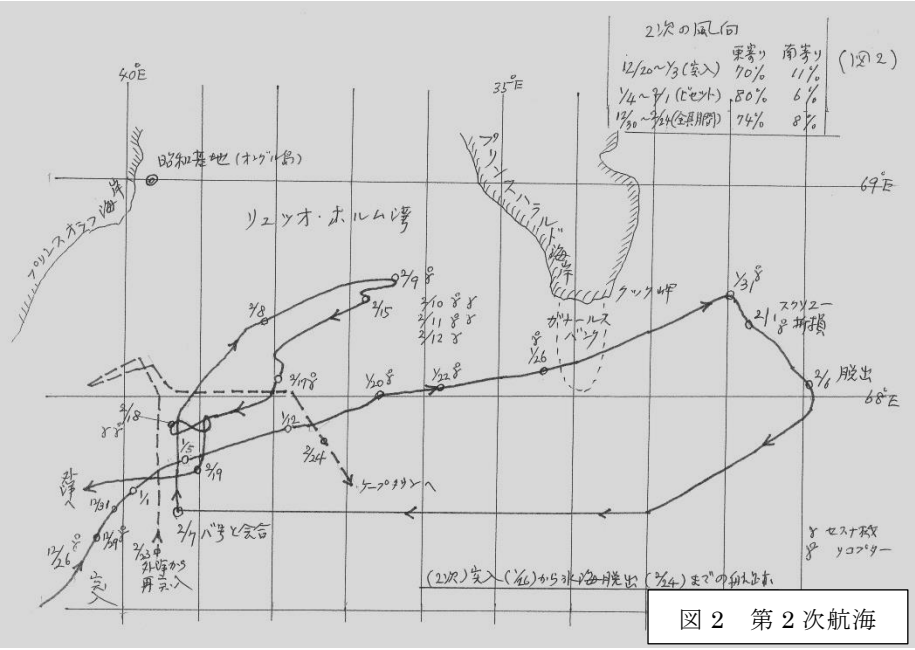


図２　第２次航海

1 月 24 日、大陸から続く定着氷（厚さ 1.6m）に無事接岸した。接岸後は犬ぞり隊、雪上車により約 158 ﾄﾝの資材を運び、昭和基地を設営し 11 人の越冬隊員を送ることができた。

2 月 15 日離岸し、一路開水面を北上したがやがて密群氷に会い、待機となる。

17 日以後は密群氷に阻まれ「宗谷」は自力脱出することが出来ず苦闘する。19 日船内には「宗谷」の「越冬問題」が話し合われ船内は重苦しい空気につつまれた。その空気のなか脱出のため外国砕氷船の支援要請となり、ソ連の“オビ号”が本船に向った、28 日「宗谷」は“オビ号”の支援を受け無事氷原を脱出、ケープタウンに向った。（図１）

第 2 次の航海

2 次の航海は 1 次と比べると天候は不良であった。12 月 20 日氷縁に到着、その後ビーバー機による氷状調査を出来ず 26 日氷海に突入した。しかし密群氷に阻まれ、前進・停止・爆破を繰り返し前進を試みたがついに 31 日の低気圧で「宗谷」はビセット状態となり、西方クック岬付近まで流された。ついに南緯 68 度線を超えることは出来なかった。

2 月 1 日、左舷推進器を折損する事故が起きたが 6 日氷海より自力脱出した。

7 日、アメリカの砕氷船“バートンアイランド”号と会い、その支援をうけ南進を試みたが氷状悪く、基地に接近することが出来なかった。10 日、11 日セスナ機により 1 次越冬隊員を「宗谷」に収容、その後天候の回復を待ったが、ついに 2 次越冬隊員を基地に送ることが出来なかった。

残念、15 匹の犬を基地に残すことになった。（図 2）

考察：流氷と風向との関係

リュツォ・ホルム湾の流氷は主に風により左右される。東寄りの風は流氷を湾奥へ押し込み、南寄りの風は北方へ拡散する。この表を見ても 1 次は南寄りの風が多く 1 次は恵まれた天候であった。

隊次	期間（活動ステージ）	風向 北東～東南東	風向 南東～南西
1次	1/7～1/16（調査）	24%	43%
	1/17～1/24（突入）	47%	28%
	1/7～2/28（全期間）	48%	28%
2次	12/20～1/3（突入）	70%	11%
	1/4～2/1（ビセット）	80%	6%
	12/30～2/24（全期間）	74%	8%

1 次行動と 2 次行動の風向の違い

これは大陸の極冠高気圧のリュツォ・ホルム湾への伸張が弱くポーラーフロント（寒帯前線）を通る低気圧がしばしば南下し氷縁に存在する南極前線に合流するためであろう。

「宗谷」の砕氷能力（1.2m）はリュツォ・ホルム湾の氷に対しては弱い。望むのは「南風」である。「南風」は「宗谷」にとって流氷の扉を開く“Key”である。

話　題

南極観測船「ふじ」は退役後、南極の博物館として公開している。船内は航海時そのままの様子や暮らしぶりや、南極の自然や観測隊の仕事を紹介している。「ふじ」からの話題を紹介する。

南極観測船「ふじ」便り

～ナンキョクオキアミを見に名古屋へ行こう！～

昨年、世界遺産に富士山が登録され、日本中が“ふじフィーバー”に沸いたことは記憶に新しいことだと思いますが、南極に関係する人々にとって「ふじ」といえば、日本の 4 番目の観測基地である「ドームふじ基地」、そして 2 代目の観測船として活躍した南極観測船「ふじ」の名前が挙がるのではないでしょうか。

南極観測船「ふじ」は、昭和 40 年に建造、その年の第 7 次隊の輸送任務に就き、その後 24 次隊まで、18 回の南極航海を行った後、引退しました。その後、昭和 60 年から、博物館として、私の勤める名古屋港に係留、展示されています。

ふじが名古屋港で公開されてから 7 年後、「ふじ」の目の前に当時としては日本最大の水族館がオープンしました。「名古屋港水族館」です。

この水族館の展示テーマは、「南極への旅」。「ふじ」がたどった日本から南極までの航路に沿って、その水域の生物を 5 つのコーナーに分けて順に展示していくというものです。

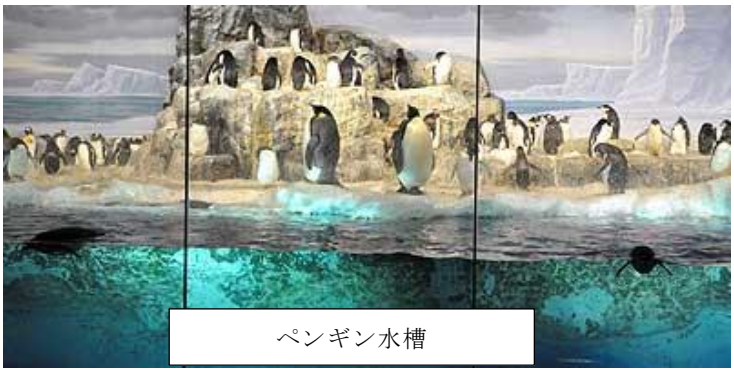
最初のコーナーは「日本の海」。マグロやカツオ、そして数万匹のイワシたち遊泳する黒潮水槽が目を引きます。

「ふじ」が通っていった太平洋には日本海溝やマリアナ海溝といった世界でも特に深い海がひろがっています。というわけで、続いてのコーナーは「深海ギャラリー」です。世界最大の甲殻類タカアシガニや、最近話題のダイオウグソクムシなども飼育されています。

南極を目指す旅で、必ず通過しなければいけないのが赤道です。３つ目のコーナーは「赤道の海」。色鮮やかな熱帯魚たちや、太平洋を横断するウミガメの水槽があります。現在こちらのコーナーは平成 26 年 12 月までリニューアル工事中です。

「ふじ」が、航海途中で必ず立ち寄ったのがオーストラリアです。そこで、第 4 のコーナーは「オーストラリアの水辺」。ユニークな形の淡水ガメや、オーストラリアハイギョなどが飼育されています。

そして、南極への旅の最後のコーナーが「南極の海」です。この水族館の目玉の一つとなっているのが、ペンギン水槽。南極で見られる 4 種類のペンギン、約 160 羽を飼育しています。なかでもひときわ目立つ巨大なエンペラーペンギン（コウテイペンギン）は世界でも 3 か所でしか飼育されていません。水槽内の気温はマイナス 2 度。南極の日照にあわせて明るさをコントロールしており、この水槽の中の季節は日本とちょうど逆になります。また、このコーナーでは飼育係が実際に南極に行って採集してきた貝や魚たちも飼育されています。



ペンギン水槽

そして世界中の水族館の中でも、ここでしか見られないのが「ナンキョクオキアミ」です。

名古屋港に展示されている南極観測船「ふじ」。その「ふじ」が向かった南極は、いうまでもなく「地球上でもっとも冷たい、氷で覆われた大陸」です。南極の気温は年中通じてほとんどが氷点下。過酷な環境ですから、真冬の南極大陸上では、子育て中のエンペラーペンギン以外には、生き物の姿を見かけることはありません。もちろん、越冬隊員を除けばですが。

ところが、南極の海の中は違います。南氷洋、そこは生命の宝庫です。極寒の陸上

ナンキョクオキアミの説明ボード

と違い、南極の海水温は 0 度～マイナス 2 度と一年中を通じてほとんど変わりません。われわれ人間から見れば十分冷たい水温ですが、この冷たさに適応できる生物にとっては、まさに安定した環境なのです。

南氷洋には地球上で最大の生物として有名なシロナガスクジラをはじめとして、多くのクジラたちが生息しています。そして南極の海を代表する生き物といえば、なんといっても数多くのペンギンたち。このようなクジラやペンギンなど多くの南極の生き物たちの食生活を支えているのが「ナンキョクオキアミ」です。

一見、エビに似たこの生き物は、地球上の生物の中で、人類に次いで 2 番目に多いバイオマスを誇っているともいわれています。私たちが深刻な食糧難に陥るようなことがあったら「ナンキョクオキアミに頼れ」ともいわれた所以です。「人類最後のタンパク資源、ナンキョクオキアミは人類を救う」といった学者もいるほどです。ですから、このナンキョクオキアミの生態を調べることは、我々人類にとって大きな意義があるのです。しかしこのオキアミは南氷洋という限られた海域にしか生息していません。観察しようにも冷たい海の中です。そんなナンキョクオキアミを周年飼育し、世界で唯一、繁殖を成功させている水族館が名古屋にあります。それが「ふじ」の目の前にある「名古屋港水族館」です。

従来、人工飼育下での飼育、繁殖が困難とされてきたナンキョクオキアミですが、きめ細かい照度のコントロールと、エサの与え方に工夫を凝らした結果、長期飼育（最長記録は 8 年 18 日）と繁殖成功にたどり着くことができました。

筆者は水族館時代、4 年間ペンギンの飼育を担当していました。マイナス 2 度の室内で少ない日でも 1～2 時間は作業がある過酷な日々でしたが、それでも「オキアミの担当よりはいいや」と思っていました。産卵期になると、オキアミの担当飼育係は、気温 0 度の薄暗いバックヤードで、水槽内に透明の卵が産卵されていないかじっと目を凝らし続けます。何時間もほとんど身動きせずに。まさに身も凍る思いとはこのことです。

このような陰の努力もあって、現在展示しているオキアミは名古屋生まれの 6 代目。2007 年には、動物園水族館界では、最高の栄誉とされる古賀賞を「ナンキョクオキアミの長期飼育と継代繁殖」の功績により受賞しました。生きているナンキョクオキアミをこの目で見られる場所、それは南極と名古屋なのです。

名古屋みなと振興財団（名古屋海洋博物館・南極観測船ふじ）

（学芸員　加藤浩司）

～南極尽くしの稚内より～

8 月 1 日、稚内総合文化センターにおいて、稚内市青少年科学館リニューアル記念事業として「南極とわっかない」～稚内での訓練に耐え、南極へと旅立った樺太犬たち～が開催されました。

第一部では、中山由美さん（朝日新聞（45 次越冬、51 次夏隊））、山崎哲秀さん（犬ぞり極地探検家（46 次越冬））による「雪と氷の世界のいきものたち～ふしぎいっぱい南極と北極」としてトークショーが行われ、中山さんから南極に住むペンギンとアザラシ等について、山崎さんからは北極での犬

ぞりの訓練などが話されました。

またスペシャルゲストとして北村泰一さん（1 次、3 次越冬隊）が登場し、参加した子どもたちから多くの質問が寄せられていました。

第二部では、約 60 年ぶりに稚内市を訪れた北村さんによる「第 1 次南極観測隊と犬たち」と題しての講演が行われ、当時の動画や写真などで昭和基地へ向かう宗谷船内での様子、基地周辺での犬たちが活躍した様子、一緒に連れて帰れなかった無念さ、タロ、ジロに再会した時の気持ちなど、当事者としての貴重な話に、会場に集まった約 150 人の皆さんが耳を傾けていました。

8 月 2 日には、稚内公園にある南極樺太犬供養塔前で、南極樺太犬の偉業を讃え「南極樺太犬慰霊祭」が行われました。この慰霊祭は 1961 年から毎年行われており、今年は北村さんが初めて参加され、極地で過ごした仲間たちに向け、想いを込めたメッセージを声をつまらせながら呼びかけていたのがとても感動的でした。

また、8 月 2 日、3 日の両日は、稚内市の代表的な夏祭り「みなと南極祭り」が開催されており、8 月 1～3 日の 3 日間は、稚内市が「南極」一色となっていたのでした。

（寄稿　稚内市役所の皆さん）

左：講演会の様子、右：南極樺太犬慰霊祭の様子

9 次隊の東北旅行に参加

南極倶楽部にお邪魔したのが縁で、9 次隊恒例の春山行に誘っていただきました。今年の行き先は「村山隊長がご存命だったら」を想定して決めたとのことで、5 月末に 2 泊 3 日で宮城、山形へ。旅行を楽しみつつ、被災地にささやかながら貢献をというものでした。

9 次隊旅行集合

詳細を企画し案内してくださったのは、9 次隊で仙台在住の森岡昭さん。初日は名取市の仮設商店街「閖上さいかい市場」で昼食をとり、閖上港周辺の被災地を見学。見渡す限りの更地で最初はなかなか実感できなかったのですが、復興支援施設で震災前や当日の映像を見たり、お話を伺ううちに、津波の恐怖がリアルに迫ってきました。

夜は宿泊場所でもある秋保温泉のロッジで鉄板焼き。シメの特製うどんまでおいしくいただきました。翌日は蔵王で御釜や雪形を眺め、名物のお蕎麦を堪能し、山奥の

鉄板焼き　おいしくいただきました

秘湯一軒宿に宿泊。最終日は晴天の天元台高原へ。標高 2,000mもある西吾妻山に登り（リフトで）、みんなで残雪を踏みしめたのでした。

影絵　あれ！？指が動かない・・・

どれも貴重な経験、素敵な思い出ですが、特に忘れられないのは 2 日目夜のハプニングでしょうか。予定していた DVD 鑑賞会が機材の都合でできなくなってしまったのですが、その瞬間、ガッカリするどころか我先にとシーツのスクリーンの前で影絵ごっこ！　「キツネ」とか「ワシ」とか大いに盛り上がりました。楽しい思い出をありがとうございます。「土瓶」も久しぶりに見ました。

（会友　鈴木かおり）

南極関連情報

第 56 次南極地域観測隊員等を決定

平成 26 年 6 月 20 日（金曜日）に開催された第 144 回南極地域観測統合推進本部総会において、第 56 次南極地域観測隊員等 44 名を決定した。

第 56 次隊は 既に決定済みの野木隊長、三浦副隊長を加え、第 56 次南極地域観測隊は総勢 59 名（夏隊 33 名、越冬隊 26 名）で編成される。また、夏隊同行者は最大 26 名で編成予定。

白石和行国立極地研究所長が南極を巡る「南極観測実施責任者評議会（COMNAP）」議長に選出される

2014 年 8 月 27 日－29 日にクライストチャーチ（ニュージーランド）で開催された南極観測実施責任者評議会年次総会において、白石和行国立極地研究所長がアジアからは初となる同評議会議長（任期 3 年：2014-2017）に選出された。

南極観測実施責任者評議会（COMNAP*）は、実際に南極での研究活動を実施している、29 か国の南極条約協議国の代表で構成されている。

今回の年次総会で、議長（日本）と副議長 5 名（英国、韓国、チリ、フランス、オーストラリア）及び事務局長からなる執行委員会によって、新しい運営がスタートすることが決まった。（国立極地研究所 HP より）

日本国内で保管・展示されている KD604 と KD605 が、日本機械学会の「機械遺産」に認定される

日本機械学会は 2014 年度の「機械遺産」に日本で初めて南極点に到達した雪上車 KD604 および KD605 の 2 台を選定した。1968 年 12 月 19 日、第 9 次南極観測隊が南極点に到達し、5 ヶ月で往復 5,200 km の行程を踏破した 3 台のうちの 2 台である。雪上車は小松製作所が開発したもので、現在は KD604 は国立極地研究所の南極・北極科学館（立川市）に、KD605 は白瀬南極探検隊記念館（秋田県にかほ市）に保存、展示されている。（写真提供、国立極地研究所）

極点旅行で活躍する KD 型雪上車

＊COMNAP：Council of Managers of National Antarctic Programs

連載　支部便り⑲　（山陽支部）

山陽支部へのお誘い

第 15 次南極地域観測隊結成 40 周年記念会を 2013 年 11 月広島市で開催したおり、ＯＢ会渡辺興亜氏（11、15、29 次越冬）から、山陽支部の体制固めが必要であるとのアドバイスを受けました。

山陽支部の実情を申しますと、長く支部長として山陽地区をまとめておられた広島大学名誉教授の藤原健蔵先生（第 9 次観測隊員として南極点に到達）が、2013 年 9 月 7 日急逝されました。当時から幹事長であった私藤井功ですが、これが全く役立たずであり、もっぱら前杢英明幹事が諸事万端こなしておられました。

早速彼に連絡を取ったところ、既に関東へ転勤されておられました。長年怠けていた事を悔やみましたが、幸いにも広島には第 15 次越冬隊の同僚渡部和彦、稲村繁和がおります。3 人で集い、以前からの体制を尊重しながらの幹事会再編協議に入りました。

しかし支部長も決まらないまま年が明けてしまい、東京で興亜氏と酒を酌み交わした折「山陽支部の動きが鈍い。どうなっているんじゃ。しっかりせい！」と叱られてしまいました。

2014 年 6 月森川武（20 次越冬）佐藤高晴（46 次越冬）を加え 5 人で幹事会を開き、独断と偏見に満ちているかもしれませんが、渡部和彦（広島大学名誉教授）を支部長とした山陽支部役員を決めました。

その後、ＯＢ会本部と連絡を取りながら広島県、山口県在住の方々にメールや手紙を送り支部名簿再編に取りかかりました。直ぐに返事をいただける方が多いのですが、返事は残念ながら 7 割にとどいておりません。

山陽支部はメーリングリストを作り情報を共有した楽しく強力な支部作りに専念いたします。思い出話ばかりではなく、極地の環境、地球の自然と平和に興味を持った若い人々を育てることもＯＢ会の役目と心得ております。

近く支部総会を計画します。多数のご参集をお願い致しますと共に、まだ返事を頂けていない方は、連絡をお待ちしております。（今後の連絡先：広島大学総合科学研究科　佐藤高晴）

最後になりましたが山陽支部役員を紹介いたします。

山陽支部長　渡部和彦（15 次越冬）
幹事長　藤井　功（15 次越冬）
幹　事　稲村繁和（15 次越冬）
　　鈴木盛久（18 次夏）
　　加納　隆（19 次夏）
　　森川　武（20 次越冬）
　　佐藤高晴（46 次越冬）

（文責　藤井功）

支部便り⑳　（九州支部）

九州支部は南極地域観測 50 周年記念（1956～2006）事業の九州地区での実施を目的に 2005 年 11 月に 16 次越冬の松本徑夫さんを支部長として福岡市で結成されました。

九州支部の主な活動は 2006 年に福岡市で実施した 50 周年記念事業及びその後 2012 年 4 月に鹿児島市で実施したしらせ 100 周年記念事業です。

この二つの事業をふりかえると九州支部で連絡可能な数は現在 30 名程度です。これは「固定客」の数です。2006 年の支部発足以降、新たに固定客になったＯＢの把握は

2005 年 11 月発足時の支部役員初顔合わせスナップ写真

出来ておらず、その数は含まれていません。2014年から以下の新役員で九州支部が発足しました。九州支部の今後の当面の活動方針としては、会員間の親睦と新規会員の発掘に努めていきたいと考えています。

支部長：　村上雅健（17 次越冬）
幹事長：　宮田敬博（39、44 次越冬）
副支部長（福岡）：　坂　翁介（29 次越冬）
副支部長（鹿児島）：西牟田一三（8、14 次越冬）
副支部長（長崎）：下田泰義（29、41 次越冬）

（文責　村上雅健）

連載「帰国後の各隊の動き」（開催日順に掲載）

第 15 次観測隊結成 40 周年の記念

第 15 次観測隊は、1973 年秋、盛大な見送りを受けて晴海港を出航してから 40 年が経ちました。また、村越越冬隊長が米寿を迎えられることもあり、15 次隊の定例の集まりで、「結成 40 周年と米寿のダブルのお目出度い事を祝おう。」との掛け声のもと、村越隊長の言葉を借りれば、「箪笥から駒というか、まさかがまさかになって」隊員 3 名が在住している広島で記念会を開くことになりました。

15 次隊の皆さん

15 次隊は、夏隊 10 名、越冬隊 30 名で編成されていましたが、残念ながら既に 7 名が故人となっています。記念会には海外の勤務先や遠方からも集まり、隊員 18 名（うち奥様同伴 5 名）と故人となられた隊員の奥様 2 名、合わせて 25 名の出席となりました。村越隊長から開催に当たり、奥様方に心配りされた挨拶をいただき、記念会が始まりました。米寿のお祝いの贈呈を行い、晴海出航からパース寄港、観測研究、内陸・沿岸の調査研究、越冬生活、ケープタウン寄港、ヨーロッパ視察旅行などなど、思い出のスライドを上映し盛り上がりました。スライドの中心人物からも当時の思い出話をしていただきました。40 年前の昭和基地食堂でみんなと話しているように思い、部屋から出れば基地の景色が目の前に広がるのではないかとの錯覚に陥りました。また、15 次隊の 1 年間の生活を綴った新聞「週間ボー15」の再復刻版を思い出の品の一つとして作成しましたので、当時の越冬生活が新鮮に蘇り、話も盛り上がりました。記念会の最後に、村越隊長が長く心に秘めておられた海軍兵学校時代の思い出、戦艦やまとの記憶などを吐露されました。

二次会で広島名物お好み焼きを詰め込み、翌日は宮島で名物「あなご飯」、「もみじ饅頭」を食べ午後 3 時頃広島駅で解散となりました。これからも 15 次隊の業績を語り継いでいき、そして、10 年後の 50 周年記念会の再会を約束して。

（文責　五十嵐 正文）

（お詫びとお願い）
15 次隊の皆さまにお寄せいただいた原稿は、この掲載文章の後に参加された皆さまのメールによるやり取りが続き、原稿を全て掲載すると本文だけで 2,300 文字を超えるため、一部掲載としました。皆さんのご協力で隊次の同窓会の報告が増えてきたことから、写真を含め 1,000 文字（会報半ページ）程度でお寄せいただくようお願いします。）

第 45 次観測隊結成 10 周年記念

45 次隊の皆さん

初代「しらせ」艦内に展示された 45 次隊撮影写真パネル

去る 2013 年 10 月 5 日、45 次隊結成 10 周年記念を兼ねた同窓会を開催しました。当日は神田啓史総隊長、山岸久雄越冬隊長出席の下、29 名の 45 次隊員とその家族数名が参加しました。開催場所は SHIRASE こと初代「しらせ」！　前座としてビール園から「しらせ」を眺めながらのジンギスカンパーティーの後、会場を「しらせ」艦上に移しました。

作業を兼ねた宿泊条件として「しらせ」に何かしらの貢献をして欲しいとの事で、見学者向けに写真パネルを寄贈する事にしました。越冬中、アルバム係が南極写真展と称して隊員達から抜け目なく集めた珠玉の写真を中心に、数十点の写真パネルを作成して展示しました。

未だに完成しない(！)。アルバム用の写真が陽の目を浴びて良かったです。

特別イベントとして神田隊長のサプライズ誕生会を行い、それ以外は皆様が経験されている通り思い出話の繰返しです。

観測甲板で海を眺めながら一人静かにタバコをふかしていた森田知弥隊員の姿が忘れられません。亡くなられたのは、その二ヶ月後でした。出発前、南極初心者の私に「一度行っちゃえばみんな家族になるからさ」と声をかけて頂きましたが、その通りになったぞ、森田さん！

（45 次航空　増田誠）

第 46 次観測隊結成 10 周年記念「飲み会でポン」開催報告

2004 年 7 月 1 日、極地研究所隊員室に全国から集まった精鋭で結成された 46 次隊。同年 11 月 28 日、成田空港を出発し、夏隊、越冬隊それぞれの任務を終了し、2006 年 3 月 28 日、越冬隊員が無事帰国。

帰国後、北海道、東京、京都などで何かと理由を付けて「飲み会」が開催されてきましたが、今年は隊結成 10 年という区切りの年であり、松原隊長から早々に「10 周年は稚内で開催せよ！」との隊長命令（？）があり、せっかく稚内市で開催するのであれば、稚内市の夏祭り「みなと南極祭り」（8/2～3）の時期に開催するのがベストということで、8 月 2 日、全国から 12 名（越冬隊員 11 名、夏隊員 1 名）と、稚内市在住の高木先生（21 次、28 次医療）、門馬さん（21 次通信）、市川さん（52 次、越冬庶務）が特別ゲストとして加わり、盛大に開催されました。松原隊長の開催の挨拶の後、各隊員から帰国後から現在までの 8 年間の近況報告がされた後、板橋や昭和基地でのいろいろな話で盛り上がりすぎてしまい、2 時間コースのところ 1 時間も超過する事態に（店主の好意に感謝）。

46 次隊＋稚内の皆さん

その後、二次会、三次会と進むにつれ、昭和基地のバーで確か同じ話をしたような？ここは何処？と一瞬錯覚を起こしたのは私だけではないはずです。次の日、次回の再会を約束し、それぞれの帰路に付いたのでした。参加された皆さん、大変お疲れ様でした。

最後に、この 10 周年事業の日程が、極地研一般公開日と重なることが後で判明し、参加ができなかった皆さん、大変失礼しました・・・　（46 次越冬庶務　近江幸秀）

第 24 次南極観測隊　ミニ同窓会開催の報告

第 24 次隊は南極生活からすでに 30 年以上が過ぎました。今年 9 月 7 日に“ミニ同窓会”を横浜元町で開催いたしました。24 次隊の同窓会は大久保ドクターの発案により昨年春には東北復興支援を兼ね仙台は松島で開催しました。その前は東京のお台場で 30 年を記念して盛大に同窓会を開催しております。今回は東京近郊在住者でミニ同窓会を開催しようとの趣旨でしたが、遠くは北海道からの参加もあり出席者は 20 人を数えました。

24 次隊の皆さん

当日はあいにくの雨模様の小寒い日でした。場所は横浜元町の裏通りにある小さな料亭です。故黒沢明映画監督がひいきにしたという店で会席料理を囲んでの宴会です。札幌から飛行機で参加の前隊長は、英国の探偵小説の主役さながら、黒縁メガネでさっそうと会場に現れました。一方、隠れ家のような店が見つからず迷子になり遅れてくる参加者もいて、志賀さん発声の乾杯を何度も繰り返すことになりました。

24 次の隊員はすでに定年を迎えたメンバーが殆どですが、近況紹介では老齢化に対抗する若々しい話で盛り上がりました。前隊長は札幌での活動に加え北見まで出張され、まだまだ忙しくなさっている様子です。極地研の渡辺さん、石沢さんからは南極観測の最近の活動報告・苦労話など伺いました。共同通信編集委員室の牧野さんは記事ネタ探しもあって参加した？とのことです。なお、極地研アーカイブ室の神田さんは 24 次隊の南極の写真アルバム数冊を持参し、観測隊の記録、特に 24 次の記録を充実させたいと参加者に資料の提供を訴えて熱弁をふるいました。また某(マスクの似合う)シバヤンは“明日は箱根に女子生徒を連れて研修に行くから忙しい（今日は二次会には参加しない)”とうらやましいことを宣い参加者から羨望と嫉妬を集めておりました。

30 年来の仲間と旧交を深めた宴席の後は、半数以上のメンバーが近くの居酒屋に場所を移しました。さらに熱く楽しい二次会でした。

次回の 24 次同窓会は、名古屋へ会場を移して開催する計画です。今回の格調高く愉快な（？！）同窓会をＯＢ会会報に紹介し、次回の 24 次隊同窓会への参加をお誘いする次第です。24 次隊の皆さん、次の同窓会を楽しみにお待ちください。

（中山芳樹　記）

新刊紹介

今回は、極地研究所が刊行している「極地研ライブラリー」について、(株）成山堂書店から提供いただいた資料を元に、新刊紹介とライブラリーのシリーズ一覧を掲載します。

南極観測隊のしごと
観測隊員の選考から暮らしまで
国立極地研究所南極観測センター 編

本書は、数ある南極関連の書籍にあるような“体験記”という切り口ではなく、現地の隊員たちが観測事業を支え運営している

生の報告を紹介する。

南極観測事業は多くの人びとの参加と支援によって成り立っており、文部科学省の関係機関を中心に、民間企業から派遣された隊員、公募によって集まった隊員も数多くいる。そして、たくさんの企業、個人の努力によって、南極で使用する機材、物資の調達がなされ輸送が行われている。

本書では、国立極地研究所が担っている設営の仕事を中心に据え、南極観測の計画がどのようにして企画され、観測隊が組織され、現場での観測実施に至るのか、その過程を生々しく描いている。今までの「極地研ライブラリー」のシリーズとしてはかなり異色の一冊に仕上がっている。

南極海に生きる動物プランクトン　―地球環境の変動を探る―　福地光男・谷村篤・高橋邦夫 共著

この本は地球温暖化の影響が心配されている「南極海」と、生態系の基礎となる「プランクトン」についてまとめた、環境保全生態学の最先端の一冊である。「プランクトン」と聞くと小学校の理科室で見たミジンコを思い出す方が多いのではないか。しかし、プランクトンには実にさまざまな仲間がいて、南極海のような氷の海にも、また、その氷の中にも生息している。本書は、厳しい環境に適応したプランクトンの多様な生態や生存戦略を分かりやすく解説している。

また、「南極海」と地球環境の関係についても、近年の最新情報を掲載するとともに、その影響予測にまで言及している。

地球温暖化が進むと海が酸性になり、クリオネが絶滅する?! 環境問題、海洋生物、自然科学などの分野に関心のある方にぜひ読んでいただきたい内容である。

極地ライブラリー　一覧　（全て四六版）

南極で隕石を探す　小島秀康 著
隕石からは太陽系創世記につながる重要な情報も判別できる。現在に至る南極観測隊の隕石発見の歴史を第一線の研究者が綴る。206 頁・定価 本体 2,300 円（税別）

アイスコア－ 地球環境のタイムカプセル－
藤井理行・本山秀明 編著
地球環境の将来予測に重要となる古気候古環境の情報が詰まったアイスコア。気鋭の研究者たちが、日本のアイスコア研究の成果をまとめた。264 頁・定価 本体 2,400 円（税）

未踏の南極ドームを探る
－ 内陸雪原の 13 カ月－　上田 豊 著
南極内陸の雪中基地での越冬、未踏のドーム頂上の発見、4 千キロの雪上旅行、新ルート開拓など第 26 次観測越冬隊が刻んだ探検の記録。252 頁・定価 本体 2,200 円（税別）

日本南極探検隊長　白瀬 矗　井上正鉄 著
鎖国の閉塞した時代覚めやまぬ明治初頭、齢十一の少年が未知の世界へ探検を志し、その夢を五十で叶えた。日本南極地域観測隊の礎となった男の記録。184 頁・定価 本体 2,200 円（税別）

バイオロギング　－「ペンギン目線」の動物行動学－　内藤靖彦・佐藤克文・高橋晃周・渡辺佑基 共著
動物たちに取り付けた超小型カメラや深度計からわかる映像や体の動きで、これまでわからなかった動物たちの日常が見えてくる。208 頁・定価 本体 2,200 円（税別）

氷海に閉ざされた 1296 時間　－第 12 次南極越冬隊の記録－　山田知充 編
氷に活動を阻まれ続けた「第 12 次南極越冬隊」が、いかに難局を乗り越え帰還したのか。29 人の隊員自ら撮影した写真と共に綴るノンフィクション。224 頁・定価 本体 2,200 円（税別）

極限の雪原を越えて　-わが南極遊記-
木崎甲子郎 著
常人には想像もつかない南極における数々の苦境や絶望の崖っぷちを乗り越えてきた「極地探検請負人」の物語。216 頁・定価 本体 2,200 円（税別）

南極観測隊のしごと　-観測隊員の選考から暮らしまで-　国立極地研究所南極観測センター 編
半世紀を超えて、日本の南極観測を支えてきた国立極地研究所がまとめた南極観測のガイドブック。隊員の ON と OFF をカラーで紹介。256 頁・定価 本体 2,400 円（税別）

南極海に生きる動物プランクトン　-地球環境の変動を探る－　福地光男・谷村篤・高橋邦夫 共著
“流氷の妖精” クリオネに存亡の危機？　南極海にすむ動物プランクトンの多様な生存戦略と，そこから見えてくる地球環境の将来を徹底解明。224 頁・定価 本体 2,400 円（税別）

訃報　ご遺族や会員の方からお知らせ頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。

（敬称略）

お名前	隊次	部門	逝去月	享年	お名前	隊次	部門	逝去月	享年
岡本貞三	2s,3s	航空	H21.11	87	尾上　實	宗谷 1,2,3		H25.12	84
五十嵐高志	15w	機械	H25.12	73	畠山宗代	宗谷 6		H25.12	91
牧角　勉	ふじ 10,11	整備士	H26.5	87	滋野千秋	宗谷 5,6		H26.9	79

南極ＯＢ会「第 56 次日本南極地域観測隊壮行会」の開催

例年通り以下の通り開催します。会員、会友の皆様の多数の参加をお願いします。
１．日　　時：　2014 年 11 月 7 日（金）　受付 18：00 より
２．場　　所：　レストラン「アラスカ」パレスサイド店
〒100-0003　千代田区一ツ橋 1-1-1
電話　03-3216-2797
３．式 次 第：
（１）講演　演題　「南極条約体制：科学と法政策のインターフェイス
－南極海捕鯨事件判決を踏まえて」
講師：柴田明穂氏（神戸大学　国際協力研究科　国際法研究室　教授）
（２）第 56 次日本南極地域観測隊壮行会
４．会　　費：　￥8,000 円（56 次隊員，しらせ乗員は招待、家族は半額）
詳細は、同封の案内状または南極ＯＢ会ホームページを参照ください。

2015 年南極ＯＢ会名入りカレンダーの販売

南極 OB 会 オリジナル カレンダー 2015 年用 いよいよ登場！
新感覚のオリジナルカレンダーを販売します．これまでの大型カレンダーと共にお使いください．

特徴
（１）見開き A4（日付部分は A5 相当の大きさ）の小さめですので，様々な場所に掛けられます
（２）2015 年版は写真ではなく，元隊員の

水彩画から 12 ヶ月分をチョイスしました
予定価格：一部 640 円(税込)
また、極地研究振興会「南極カレンダー」は 21 次隊より製作しているそうですが、2015 年版は南極観測再開 50 年を記念し、この 50 年間の歴史的な情報も満載しているとのことです。
「新カレンダー」と従来の極地研究振興会「南極 OB 会名入りカレンダー」の注文受付を開始します。
ご希望の方は同封の申込用紙を利用しお早めにお申し込みください。

南極ＯＢ会アーカイブ事業報告

南極ＯＢ会は元観測隊員等が保管していた隊運営資料、生活一般資料、観測・設営機材、装備・衣料品、記録ノート、スライド、写真、グッズ等を常時、受け入れています。資料の受け入れについては南極ＯＢ会事務局にお気軽にご相談ください。

アーカイブ受け入れ資料（平成 26 年 6 月 29 日受け入れ）－
第 24 次越冬隊員桜井治男氏提供
①第 24 次みずほ基地滞在スライド集、②みずほ基地食生活写真・記録資料、③みずほ旅行・基地生活記録資料、④越冬隊記録スライド集、⑤越冬隊記録スナップ写真集（プリント）、⑥観測機器、施設写真集、⑦カラー・モノクロネガ写真、⑧写真アルバム「自然と人間」

＊＊＊　広報委員会からのお知らせ　＊＊＊

○通信費納入のお願い
年度初めに通信費の納入のお願いと振込用紙を同封しました。また、過去（5 年間）と今年度の通信費納入状況を封筒の宛名ラベルに記入しています。該当年度に「○」が付いています。表示内容に誤りがありましたら、お手数でも南極 OB 会事務局へご連絡ください。引続き通信費の納入についてよろしくお願いします。

（編集の終りに）
先日第 2 次安倍改造内閣が発足し、自由民主党幹事長に就任された谷垣禎一氏のネクタイの柄が南極大陸のマークであることを目ざとく見つけた藤田建さん（45次･53次越冬）が､『谷垣新幹事長が南極観測50周年ネクタイをしている！！』とメールで連絡してくれました。報道写真やニュースをみると確かにネクタイに南極大陸のマークがありました。谷垣氏には、南極観測に大変意を払っていただき、何度か南極 OB 会の行事に参加いただきました。谷垣新自民党幹事長の今後のますますのご活躍をお祈りします。

なお、右の写真の 50 周年記念ネクタイですが、事務局に在庫が若干あるとのことです。購入を希望される方は南極 OB 会事務局までご連絡ください。

****

南極ＯＢ会事務局　〒101-0065　東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301
電話　：03-5210-2252　　FAX　：03-5275-1635
メール　：nankyoku-ob@mbp.nifty.com
郵便振込：加入者名　南極ＯＢ会　00110-1-428672
南極ＯＢ会ホームページ　：http://www.jare.org /

****